

# 九州大学歴史的什器の教育活用 ——「拡張された博物館体験」

真保 晶子

芝浦工業大学システム理工学部：〒337-8570 埼玉県さいたま市見沼区深作307  
shimbo@shibaura-it.ac.jp

**要旨：**九州大学歴史的什器（以下九大什器）を教育に活用する可能性については、「高等教育的価値」と「生涯学習的価値」の2方向への利用が提示されており、前者については特に、実技・実習向けの利用を想定した大学等の高等教育における利用提案が例示されていた。本稿では、そのような建築史あるいは工学系家具史の実技・実習以外の教育利用として、九大什器の活用提案を卒業論文で取り上げた芝浦工業大学における事例を紹介する。そしてそれらの具体的事例をもとに、九大什器の「教育活用」そのものにおける「拡張された博物館体験」の意義を論じる。

**キーワード：**九州大学歴史的什器，博物館資料の教育活用，拡張された博物館体験

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景および先行研究と本稿の位置づけ

九州大学歴史的什器（以下九大什器）の「救済」とその博物館へのコレクション化、およびその一部を学外でも活用する「在野保存」に至るまでの経緯については、三島・岩永（2014）<sup>1</sup>、新井・三島（2018）<sup>2</sup>で詳しく述べられている。新井・三島（2018）は、九大什器の歴史的価値と活用について整理し、九大什器を教育に活用する可能性として「高等教育的価値」と「生涯学習的価値」の2方向への利用を提示している。このうち後者については、什器コレクションを所有する九州大学総合研究博物館（以下九大博物館）において、自館での展示利用や他館への在野保存などの実践がなされており、別稿に譲る。

本稿は、前者の「高等教育的価値」、特に大学における学生教育における活用に焦点を当てるものである。新井・三島（2018）は、高等教育の枠組みにおける利用として、「工学系・芸術系・歴史系などの学生の実習教材としての高等教育的価値がある」と述べており、大学の学部・学科との連携や、想定される「具体的な作業」として、採

寸、三面図の手描きやCAD起こし、「材料検分・塗装検分・細部構造解析・記録のデジタル化」など、実技・実習向けの提案を例示している<sup>3</sup>。

これまで九大什器が高等教育的利用に供された事例として、まず九大工学部建築学科の学生による卒業論文が挙げられる<sup>4,5</sup>。これらの卒論のうち、倪ら（2020）については、既存および新設する在野保存先の店舗について詳細に報告するものであり、松田・堀（2021）は、九大什器コレクションと九州大学文書館の資料を活用し、両館のサポートも受けながら、九大什器の意匠を題材にしてまとめられている。次に、九大以外の学生による研究として、自身が所属する大学に残る家具に関心を持ち、それを題材として取り上げた事例がある<sup>6</sup>。この論文では、九大什器および九州大学歴史的什器保全再生プロジェクト<sup>7</sup>について言及されるとともに、新井が日本家具史からの助言を行っている。以上、2009年の九大什器プロジェクト始動以降、件数は少ないものの、什器コレクションの高等教育での活用事例が九大学内に存在していること、またいずれも、若い学生が自分の大学に伝わる歴史的な家具類に関心を持ち、九大什器プロジェクトの理念が大学を超えて広がりつつあることがわかる。

九大什器の研究は、建築史、家具史、デザイン史の研究対象物として最も活用され得る。一方で、日本の歴史的な什器の再利用・利活用に関する研究事例はほとんどなく、九大什器の「教育活用」そのものの意義に焦点を当てた研究も、未だ報告されてきていない。

## 1.2 本稿の目的

以上を踏まえ本稿では、九大什器コレクションの教育活用例を示すとともに、そこでの学生の体験に着目し、九大什器の「教育活用」について考察することを目的とする。まず次節において、筆者が取り組んだ九大什器の教育活用の実践を紹介する。筆者が所属する芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科では、システム工学を学部の共通基盤とした上で、環境系、都市系、建築系の3領域の分野を横断的、総合的に学ぶための教育が行われている。本学科に所属する学生で、筆者が指導する学生たちは、2017～2022年度の間、九大什器とその利活用について、様々な観点から卒業論文で取り上げてきている。これらの具体的事例をもとに、続く第3節において、三島(2018)<sup>8</sup>が言及した、「拡張された博物館体験」(詳細は後述)に注目し、九大什器の「教育活用」そのものの意義を考察する。

## 2. 九大什器コレクションの教育活用の実践 —— 芝浦工業大学システム理工学部環境 システム学科の事例

前述したように、九大什器は建築史、デザイン史、家具史などの枠組みの中の研究対象として最も活用され得るが、それ以外の分野やアプローチにおいても様々な活用し得る。ここでは、著者が所属している、芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科での4年生の卒業研究の5例を紹介する。

### 2.1 芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科 とその教育の特色

芝浦工業大学システム理工学部は、元々「システム工学部」3学科としてスタートし、その後、理学系の学科が新設され、5学科を有する「システム理工学部」となった。当初の学部開設時から、「システム工学」の講義およ

びグループ演習が学科混成で行われ、現在も、全学科の2年生の前期・後期必修科目となっている<sup>9</sup>。そのため、建築・都市・環境の3分野から構成される環境システム学科の学生たちも全員、2学年時に「システム工学」を履修する<sup>10</sup>。また、2017年度から、環境システム学科の3年生後期に、様々な地域のご協力をいただきながら、現地調査、関係者からのヒアリング、設計、提案などを行う実践的な演習科目「環境システム応用演習」が始まった<sup>11</sup>。この演習は、当該学科を構成する建築・都市・環境の異なる分野が混成するチームを組み、各グループが特定の地域を対象に、これまでの演習の集大成として横断的・総合的に取り組むチームラーニング方式の演習である。並行して2018年度からは、当学科の卒業研究では、研究がSDGsのどの目標に貢献するものかを明記することが推奨されるようになっている。

このような実践的・実益的な学部・学科の特色を受け、真保研究室では、上記学部や学科教育により慣れ親しんだ手法として、現地調査、ヒアリング、アンケートなどのエビデンスに基づき、何等かの提案を行う形式の卒業研究を実施することが主流であり、九大什器を卒業研究のテーマとして扱う場合も同様である。指導教員となる筆者自身は歴史学を専門とする研究者であるが、このような学部・学科の特性上、卒業研究のテーマとして歴史そのものに取り組む学生はほとんどいない。そのため、什器コレクションを卒研で取り上げるとしても、建築史や家具史、デザイン史など、歴史学の観点で取り組む者は殆どいない。実際のところ、歴史的な家具を現代に活用することの方により関心が高く、九大什器の活用に対する提案は、学生にとって取り組みやすいものとなっている。

### 2.2 九大什器をテーマとした卒業研究の事例 —— その 分野・対象・手法

著者は2016年度から、九大什器を用いた調査・研究において、デザイン史・文化史の視点からの共同研究メンバーとして参画してきている<sup>12</sup>。2.1で述べたとおり、九大什器プロジェクトは、芝浦工業大学の環境システム学科学生にとって、建築・都市・環境の3領域のいずれにも関連している素材であるため2017年度以降、真保研究室に所属する学生が、卒業研究のテーマとして九大什器を扱ってきた。2022年度までに取り組まれた卒業研究5

本について、内容的に大まかに分類すると、以下のようになる（件数は延べ数）：

- A. 特定の室内・施設への什器の活用提案という点で建築系…4件
- B. 環境分野の特色が強く出ている内容…1件
- C. 教育の場に関わる視点を持つ…3件
- D. 心理的な観点に焦点をあてている…1件
- E. 都市・地域に焦点を当てた活用提案…2件

以下、時系列ではなく分類の関連順に、各卒業研究を具体的に見ていく。

### 2.2.1 「A 特定の室内・施設への什器の活用提案」

「A 特定の室内・施設への什器の活用提案」は4件あるうち、まず、「B 環境分野の特色が強く出ている」のが関根（2018）<sup>13</sup>である。

関根は、九大什器資料3点について二酸化炭素固定量を計算し、また、「10年ごとに廃棄・購入を繰り返した」と仮定した場合の木製家具の総量と、「100年間使用・保存された」場合の木製家具について、二酸化炭素排出量を比較し、九大什器を活用することによる環境への寄与を示した。併せて、一番最初の在野保存貸し出し先である熊本市のブックカフェ「橙書店」への現地調査とオーナーへのヒアリング、また、当該店舗のご協力による利用者へのアンケートなどを行うことにより、九大什器の在野保存による活用の実情の全体像をつかみ、それを踏まえて、「使用期間（短期・長期）」、「デザイン性（見た目）」、「機能（使い勝手）」を基準とした什器選定を元に、歴史的什器を活用できる可能性のある施設の種類を分類した。具体的な在野保存先の施設として、実在する熊本市の保育園を選定し、保育園への現地調査とヒアリングを経て、安全性や実用性などから保育園児の使う工作用紙を収めるレターケースに注目し、九大什器コレクションに多く含まれているレターケースを、保育園全体と園児の作品が映えるよう着色加工して活用する提案を行った（以上、関根2018）<sup>14</sup>。長期的な環境への貢献を明らかにし、また保育園への導入による早期の環境教育の一環として九大什器を活用することを提案した点は、環境系学生ならではの視点である。保育園での環境教育という点で、「C 教育の場」を扱ったものであるともいえる。

「C 教育の場」への導入としては他に2件、所蔵元であ

る九大以外の大学での活用を提案した卒業研究があり、それぞれ、自分が所属する大学のキャンパス内の特定の部屋あるいは建物内での九大什器の活用に焦点を絞っている。そのうちまず永井（2020）は、「D 心理的な観点に焦点」をあてており、古い家具が持つリラックス効果に着目し、芝浦工業大学大宮キャンパスの学生相談室というカウンセリングルームに九大什器を活用することを提案している<sup>15</sup>。永井はすでに学生相談室とそれに隣接する執務スペースに多数の九大木製什器を再利用してきている九大伊都キャンパスにある「キャンパスライフ・健康支援センター」を視察し、同時に福岡市内の在野保存先の視察とヒアリングも行い、九大什器活用の現状への理解を深めた。また、「色」「リラックス効果」「匂い」「音」「距離」などインテリアと感覚に関わる文献調査、自校のカウンセリングルームのカウンセラーへのヒアリング、芝浦工大の学生を対象としたアンケート調査などにに基づき、最終的に、「清潔感」「利用者の心理的安心感」「使いやすさ」「鎮静効果のある色彩」「親しみやすいサイズ」などの観点から、カウンセリングルームで活用するのに適した椅子と机を提案した（以上、永井2020）<sup>16</sup>。

一方熊谷（2023）<sup>17</sup>は、芝浦工大大宮キャンパス内のホール「齊藤記念館」<sup>18</sup>を対象とした活用提案をしている。上述した関根や永井が什器の物理的側面や個への影響にフォーカスし活用案を導いていることに対し、熊谷は、三島（2018）が在野保存の目的の可能性として挙げた「博物館体験」という質的側面に焦点を絞っている点で、ユニークである。熊谷はまず、フォークとディアーキング（邦訳1996）<sup>19</sup>による「ふれあい体験モデル The Interactive Experience Model」における、「個人的コンテキスト」「社会的コンテキスト」「物理的コンテキスト」の3つのコンテキストに注目することから議論をスタートさせ、自身が所属する大学で在野保存を行うことにより、学生たちの「博物館体験の促進を図る」ことを提案の目的に定めた。都内の博物館、九大博物館、そして福岡市内の在野保存先の現地視察とオーナーへのヒアリングを行い、「社会的コンテキスト」としての「博物館側と来館者とのコミュニケーション」の方法、また「物理的コンテキスト」としての展示物と空間全体の在り方などを確認しながら、提案のための検討をしている。熊谷は提案に際し、齊藤記念館の建設当初の図面と現在とを比較し、当初展示用途とされていた1階のスペースに、現在は全

面的に椅子・机が多数配置され、自習スペースとして活用されていることを踏まえ、このスペースが、学習家具である九大什器の在野保存の場として適しており、また、当初想定されていた用途(展示)の面でも「博物館体験」の場所として適していると考えた。現在の利用状況の調査や学生たちへのアンケートなどの結果を踏まえ、「齊藤記念館の入り口から入った際にガラス越しに群として見えるようにサルーンスペース全体に九大家具を設置」することを提案し、それにより『物理的コンテキスト』として九大家具が展示され、齊藤記念館における博物館的価値が拡張される」とし、グループでの使用が多いサルーンスペースには、コミュニティの場に配置するのにより適した机や椅子を九大什器コレクションから選び、使用が促進されることにより「博物館体験の促進へと繋がる」と結論づけた(以上、熊谷2023<sup>20</sup>)。このような、個人のみでなく、利用者全体や空間全体としての活用を促進させる提案は、教育施設での九大什器活用に共通して有効となるだろう。

永井や熊谷と同様、同じ世代の若者をターゲットとした「A 特定の室内・施設への什器の活用提案」ではあるが、大学という枠組みを超え、店舗を対象としたものが、佐藤(2019)<sup>21</sup>である。佐藤は、「多くの人に今使っている家具が歴史的価値があるものだとして理解してもらいたい」という思いがあり、「持続可能性を考慮して若者(18～30歳)にターゲットを絞った」としている。「若者に歴史的価値のある家具について関心を」持ってもらうために効果がある対象としてスターバックスに着目し、スターバックス本社の企画担当者へのインタビュー、若者へのアンケートなどをもとに、九大什器がマッチしやすい特定の店舗を選定し、そこでの利用提案を考えた。さらに佐藤は、九大文書館や九大博物館に残る備品台帳に言及し、「家具がどのような物語を送ってきたのかを知ることができる」点にも注目し、若者の興味を惹くために、九大什器の歴史をラベルにして家具本体に貼ること、家具付近に掲示板を設置すること、また家具に清潔感を持たせることなどを挙げた(以上、佐藤2019<sup>22</sup>)。これら具体的な工夫は、若者に九大什器の歴史や経緯を知ってもらい、次世代への九大什器活用の継承という持続性を考える上で、大いに参考となるものである。

## 2.2.2 「E 都市・地域に焦点を当てた活用提案」

上述した佐藤も「E 都市・地域に焦点を当てた活用提案」といえるが、特定施設ではなく、街全体への視点で取り組んだものが、新野(2021)<sup>23</sup>である。新野は、九大什器の活用先として、「サブカルチャーが育ち、中古の雑貨や家具、または古着など、古いものを大切にするという特徴がある街」である東京都世田谷区下北沢に着目した。新野は、「再開発により下北沢の魅力である『古いものを大切にする文化』や『サブカルチャー』などが失われるのではないかと懸念」を持っており、「下北沢に九大家具を取り込む事で」九大什器と下北沢の相互作用・相乗効果を期待し、「九大家具の活用による在野保存(使いながら保存するという考え方)」とともに「下北沢の魅力を維持できるのではないかと」として、提案の方向性を定めた。新型コロナ緊急事態宣言が発令された2020年度であったため、新野は、福岡における在野保存などの現地調査ができなかったものの、九大什器や在野保存に関する報告から九大什器の経緯と詳細について把握した上で、在野保存先の中から8例を例示し、活用法の利点と改善点の指摘を自分自身の視点に基づき提示した。一方で新野は、提案対象地となる下北沢の文化、歴史、交通、産業上などの特徴、再開発による現在の下北沢の課題を文献調査した後、下北沢のアンティーク家具店や古い一軒家をリノベーションしているカフェを現地視察し、オーナーへのメールインタビューを行うことにより、下北沢にある「古い物を大切にする文化」の存在を明らかにした。

以上を踏まえ新野は、博物館の保存スペース不足の課題解決の一つとしても提示されてきた在野保存の役割と、下北沢における再開発により引き起こされる「魅力の喪失」という課題への解策決を併せた最終提案として、「駅前に九大家具の保管集積体験展示修理貸し出しを目的とした『下北駅前高架下九大家具博物館』」を提示し、同時に「下北沢のまちづくりマップ」を作ることも盛り込んだ。この「下北駅前高架下九大家具博物館」は「九大家具を下北沢に取り入れる為のプラットフォーム」であり、「博物館として展示を行いながら」下北沢の「各店舗に貸し出す、そして返却してもらうという機能」を中心とした、「保管・集積・展示・体験・修理・貸出・返却」の「在野保存システム」を持つとしている。こは、九大什器を使用することもでき、学ぶ場でもある一方、

レストランや休憩スペース、イベントのできる広場などもあり、人々が集える場所として想定されている（以上、新野2021<sup>24</sup>）。

2.2.3で後述するように、卒業研究では実現可能性や実装は重視していない。しかし、新野の提案と類する取り組みとして、イギリス・ブリストル市にあるリサイクルショップが街ぐるみでの活動を展開しており（真保2018）<sup>25</sup>、実現可能性が高い提案といえる。実際のところ九大博物館でも、分散型ではあるが同様の仕組みを想定し、九大博物館が位置する福岡市東区箱崎のエリアで関係が構築されつつある至近の商店街において、2023年から新たな在野保存を始めたという（三島、私信）。九大仕器プロジェクトの理念を共有できる特定の都市・地域との連携を前提とした九大仕器コレクションの活用を考えることは、社会的インパクトも持ち合わせており、今後の九大仕器の保存継承において大きな意義があるだろう。同様に、九大仕器に関わらず、同様の理念に基づき各地域の歴史的な仕器と都市・地域が結びつく仕組みが各所に生じれば、日本におけるSDGsへの取り組みとしても意義があると考えられる。

### 2.2.3 小結

以上、九大仕器をテーマとした卒業研究の分野、対象、手法等を具体的に見てきた。卒業研究の分類区分は、九大仕器自体が持つ学際的な広がりを反映し、いくつかの分野にまたがる研究となっている。いずれの学生も、新型コロナの感染が拡大していた年度を除き、全員が九大博物館の現地視察を行い、歴史的仕器プロジェクトを主担当している三島氏の案内・解説を受け、九大仕器の現物を調査・撮影・記録し、自らが考える仕器の活用計画の基盤としてきている。

ここで取り上げた5件の卒業研究は全て、仕器貸し出し先の対象選定とそこへ向けた提案という展開となっている。主要なテーマや仕器の貸し出し先の対象は、指導教員も選択肢については言及したことがあったものの、ほとんどが学生自身で決めたものである。本研究室における卒業研究は、教員と相談しながらも最終的には学生自身が決断して進めていくという個人研究方式となっており、指導教員である筆者は、学生自身が主体的に内容を考え、道を切り開いていくことを心掛けているためである。

仕器貸し出し先や展開方法などは、学生自身の提案として自由に自分自身で考えることが優先されており、実現可能性を優先したり現実化させることは前提とはなっていない。これにより、卒業研究に取り組んだ学生たちは、また、その研究発表を聞いた他の学生たちも、九大仕器の在野保存における現実的・技術的な事柄の背景にある、「物」とともに歴史を生きる喜びや、それをいかに広げ現実の生活に活かしていくことが可能かを、深く考える好機となり、その方法の発見の道筋をとともに感じることができるようになると、筆者は考えている。

在野保存先の利用ターゲットについては、保育園児（1件）、大学生など若者層（3件）、特定の対象地域の地域住民と商店主（1件）となる<sup>26</sup>。大学生など若者層をターゲットとするものが3件と最も多い理由には、やはり学生自身の視点を活かしやすい、アンケートを取りやすい、という面があるだろう。さらにこの3件のうち、自分自身の大学の特定の施設や室を対象とし、その利用学生をターゲットとした研究は2件であり<sup>27</sup>、上記の理由のほか、身近にあるよく知っている施設で、図面も手に入りやすい、利用者やそのニーズもつかみやすいなど、現実的な研究のしやすさが考えられる。一方で、5件の卒業論文はいずれも、九大仕器を地域的な文脈がない先に貸し出すという提案であるものの、他大学の所有物である仕器を芝浦工大のキャンパス内——すなわち自分の生活圏内に導入するという2件については、自分自身の現在の生活と九大仕器といういわば他者の歴史を物理的・心理的につなぐことへの試みとなるものであり、客観的他者の立場で考察する3件とはまた異なる質の思考や試みがあったことが推察される。

## 2.3 九大仕器をテーマとした卒業研究の意義——発展性と持続性

各卒業研究のテーマの根底には、九大仕器の活用を持続的に広げていくことが含まれている。そのため、特に若い学生たちが、九大仕器にいかなる視点から関心を持ち、どのような対象を活用場所として選び、活用案を提案したかをみることで、今後の九大仕器プロジェクトや九大仕器を通じた社会への貢献の方向性にとって参考になる点が多数見えてくる。従って、学生が九大仕器をテーマとして卒業研究に取り組むことは、九大博物館が推進している九大仕器プロジェクトとその仕器活用の持続性

を高める上で、大いに貢献しようと考えられる。

一方で、九大什器をテーマとして学生が卒業研究に取り組むことは、上述してきたように幅広い課題設定が可能となるため、学生が所属する研究室にとっても優れた教育リソースとして有益である。さらに、多くの研究室でも先輩から後輩に受け継がれるテーマがあるように、研究室において学生が取り組む研究の持続性も図ることができる。これまで見てきたように、九大什器をテーマとし、活用提案型の方法で取り組んだ場合、対象地、ターゲット、活用方法など、無限に発展しうる。学生は、スタート地点として先行研究となる先輩の論文を読み込みながら、それとは異なる独自の対象と活用法を新たに考えることとなり、学生の主体的な学習のあり方として最適である。そして、学生の卒業研究テーマとして受け継がれること自体が、継承されるべく救出され活用され続けている九大什器の「持続性」という理念にもつながることを、ここに特記しておきたい。

関根（2018）が提案したように、環境面では、木とともに生きる生活や古い物を使い続けることを、保育園時代から意識してもらえるような教育に、九大什器は役立つかもしれない<sup>28</sup>。また、永井（2020）が取り組んだ九大什器の心理的効用、熊谷（2023）の大学施設での活用案における九大什器の空間的利用による効用は、地理的にも文脈の薄い場所への在野保存として、より深められるテーマである。佐藤（2019）の九大什器の経緯と歴史を伝える工夫はすでに近年の在野保存先でも見られるが<sup>29</sup>、それと併せて、新野（2021）の九大什器の理念と共有できる地域や街との連携という視点も、九大什器活用の持続性という点で参考となり得るだろう。

### 3. 九大什器の「教育活用」における、博物館体験的意義

本節においては、前節での具体的事例をもとに、先に掲げた九大什器の「教育活用」そのものの意義を考えたい。ここで注目したいのが、三島（2018）<sup>30</sup>が言及した「延長された博物館体験 extended museum experience」（本稿では「拡張された博物館体験」、後述）としての九大什器の教育活用である。以下、まずは三島のいう「延長された博物館体験」について解説し、その後、上記卒業研

究に取り組んだ学生たちの体験を引き寄せ、議論する。

#### 3.1 「延長（拡張）された博物館体験」とは

「延長された博物館体験」は、九大什器の在野保存の意義の一つとして提示されたものである（三島2018）<sup>31</sup>。本稿に関連する点を中心に記述を再掲しまとめると、三島はまず、「事業所や自宅における在野保存では、日常生活のごく身近に資料が存在する状況が生まれ、市民の博物館体験（ないし博物館資料体験）や学習機会に直結する」と考えている。また什器を館外で収蔵ないしは配置した場合、その展示やケアを「学校の教職員・生徒・地域の住人などが主体的に担うようになれば、それはすなわち在野保存であり、それは同時に、その学校教職員・生徒・地域の住人にとって、優れた学習機会・博物館体験となるだろう。」とし、そして「これらはいわば館外における『延長された博物館体験（extended museum experience）』といえる」としている。また在野保存は、単なる収蔵スペースの縮減などのみを目的としてはならず、「利用者…の拡張された博物館体験を促し、その日常における学びや幸福につなげることを究極目的とする」べきであると強調している<sup>32</sup>。

「延長」とも「拡張」とも訳せる‘extended’であるが、三島はこの語を進化生物学の分野で用いられている「延長された表現型 extended phenotype」<sup>33</sup>という用語から転用したとしており（私信）、報告の中では「延長」と「拡張」を混在させている。本稿の文脈においては、より拡大および利用者自身の獲得という意味合いを込めた「拡張」という日本語を当て、三島のいう「延長された博物館体験（extended museum experience）」を、本稿では「拡張された博物館体験」と表現し、具体例をもとに考えていくこととする。

#### 3.2 「拡張された博物館体験」のプロセス——学習・創造・共有

先にも述べた通り、新型コロナの感染が拡大していた2020年度の学生以外の全員が、九大博物館や在野保存先の現地視察を行い、歴史的什器プロジェクトを主担当している三島氏の案内・解説を受け、九大什器の現物を調査・撮影・記録し、自らが考える什器の活用計画の基盤としてきた。学生たちの「活用提案型」卒業研究の各過程における「拡張された博物館体験」を具体的に考える

にあたり、まずはその経験プロセスの概略を、図1に示す。

人により順番が入れ替わる場合もあるが、「活用提案型」卒業研究においては、概ね図1のようなプロセスを経て研究が進められている。まず学生たちは、九大仕器の経緯と在野保存の目的を、事前に先行研究報告や研究室卒業生が取り組んだ卒業論文を読み、学び、対象を考え、対象地が現在地に近い場合は、福岡へ行く前に現在地での調査などできる準備をしておく(第一の経験)。その後、九大博物館で保管・利用されている仕器と在野保存先の九大仕器(すなわち博物館資料)を見学し、その実物にふれ、対象物そのものを学ぶ(第二の経験)。さらにその第一・第二の経験をもとに、九大博物館や既存の在野保存先以外に、自分自身による「新たな空間」を設定し、そこで九大仕器の新たな役割を構築したり、想定するユーザーへの想像力を深め、新たな活用案を創造する体験(第三の経験)がある。ここでは、九大仕器をどのように活用できるか、目的、意義、対象地、対象層を自分自身で構想し提案へ積み上げていく。先に紹介した卒業研究5件の具体的例としては、関根の保育園での活用提案、永井の大学カウンセリングルームでの活用提案、熊谷の大学ホールでの活用提案、佐藤のスターバックスでの活用提案、新野の下北沢に設定した近隣での活用提案に至るまでの学生自身の取り組みが当てはまる。この第一から第三段階までの経験は、卒論に取り組む学生個人が自ら対象を掘り下げていく個人レベルの経験である。

次に、卒業研究の過程で学生が、九大や既存の在野保

存先以外の対象地で想定するユーザーにヒアリングやアンケートを行う際、九大仕器の経緯や在野保存を知らない人たちに、その背景・目的・意義などを自分自身で説明していくことになる(第四の経験)。そして学生の卒業研究が完成し、学科内における発表会で、その内容が他の学生たちに共有され、また、研究室内では後輩たちにも受け継がれていく(第五の経験)。この第四から第五段階までの経験は、外に向かって開いていく経験となる。

このような「活用提案型」卒業研究と、新井・三島(2018)<sup>34</sup>でも想定されている建築史や家具史などの分野での卒業研究とで実施されうる仕器研究を比較してみた場合、上記第一・第二の経験は共通するだろう。特に建築史や家具史の分野では、学生による仕器そのものとの直接の「対話」がより深められる経験となると同時に、その経験を通し、自身の専門分野の力を伸ばすことができるであろう。また、発表会を通した他の学生たちへの共有や後輩への継承という「第五の経験」も、それを課している課程であれば、どの分野でもほぼ共通するであろう。一方、想定されるユーザーと物への想像力を深め、新たな活用案を創造する体験(第三の経験)、および九大外の対象地や想定されるユーザーへのヒアリングやアンケートを通して、九大仕器の経緯と在野保存の目的・意義を、外に向けて共有する体験(第四の経験)は、本稿で扱った「活用提案型」の卒業研究の特色といえるだろう。

特に外に向けて理念や意義などを含め共有していく第四の経験では、それまで学生が「他者の目線」でとらえていた九大仕器や在野保存を、「自分のこと」として自ら

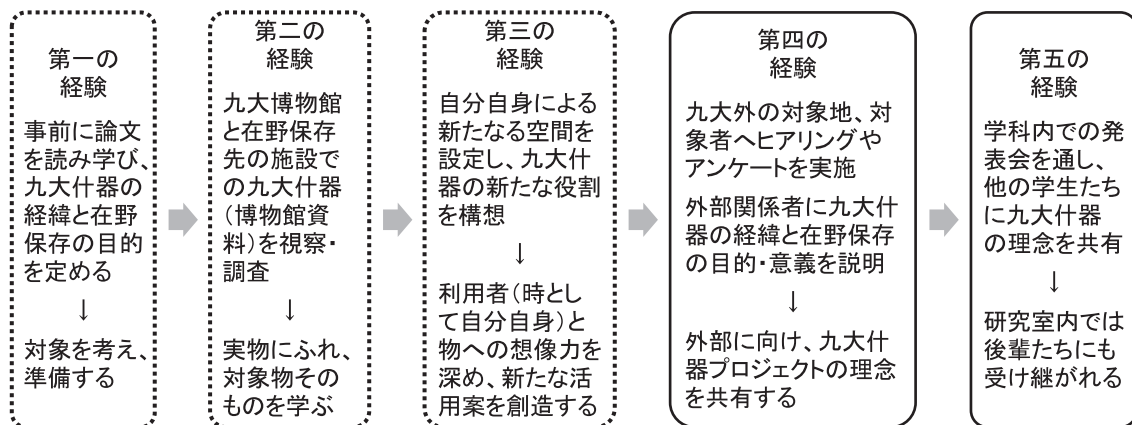


図1 芝浦工大真保研究室における「活用提案型」卒業研究における、九大仕器を通した学生たちの経験プロセス。点線は個々の学生が学び掘り下げるプロセス、実線は他者に向けて説明・共有をしていくプロセスである。

の言葉で語る立場になる。この他者に理解してもらう過程で、九大什器の理念が外部にも共有されることとなり、学生はこの理念の共有を身をもって体験していく。この点がこれら「活用提案型」の卒業研究の際立った特色であり、以下に述べる「拡張された博物館体験」の伝達につながるものといえる。

### 3.3 卒業研究プロセスにおける「拡張された博物館体験」

前項をふまえ、以下、博物館や在野保存されている貸出先施設での九大什器（博物館資料）を見学し、その実物にふれ、学ぶという卒業研究を通じた経験が、同時になされる多様な「拡張された博物館体験」であり、それらをもとに博物館外に自分自身により構想された新たな空間とそでの九大什器の新たな役割を構築する体験（＝学生の卒業研究）自体を「拡張された博物館体験」として意義付け、九大什器の教育活用の一事例となることを述べる。

これまで示してきた経験プロセスの中で、第二の経験にある、九大博物館で博物館資料として保管されたり九大博物館内部の展示や日常で活用されている九大什器に実際に触れて学ぶことは、博物館体験そのものといえる。一方で、九大博物館の外にある在野保存什器とその実施先である施設での視察や調査は、そこが博物館であるとは限らないため、通常、学生たちはそれ自体を自ら「博物館体験である」と自覚しているかどうかは不明であるが、展示と保存という視点から、博物館を見る目と同様に意識的に観察している学生もいる<sup>35</sup>。

第二段階を博物館体験とすれば、第一段階は通常の博物館体験における事前学習といわれるような個人のレベルでの事前準備といえる。すでに前節でみたように、ここで取り上げた学生のすべての卒業研究の最初期で関連論文を通し、九大什器の経緯と在野保存の目的などを学習している。また、新型コロナの拡大年度以外は、福岡への訪問調査に先立ち、現地調査などできる準備をしている。

第三の経験として、自分自身で新たに構想した空間とそでの九大什器の新たな役割を構築することは、学生自身がそれまでに培った自分自身の体験を盛り込むことであり、間接的に「拡張された博物館体験」も盛り込まれることとなる。第三段階まで取り組んだ学生はその後、

第四段階では、設定した在野保存対象地とその想定したユーザーへ向けに行う九大什器の説明などを通して、自身の博物館体験を博物館外の人々に拡張させる経験であり、今回取り上げた学生のすべての卒業研究に見られる段階である。第五段階も、学生本人による論文発表会を通して、学生の「拡張された博物館体験」を周囲の人々に共有していくことであるといえる。これらのプロセスすべてを積み重ねた学生の卒業研究自体が、「拡張された博物館体験」であると位置付けることができる。

そもそも、研究室の卒業生が取り組んだ卒業論文を読んでから始まった第一の経験が、この研究室内で後輩たちにも受け継がれていくという第五の経験で終わることは、継承され活用され続ける存在の九大什器自体にとっても象徴的といえる。学生たちにとっては卒業研究における1つ1つの作業が直接的・物理的「体験」であるが、彼ら彼女らにとっての「体験」はそれだけではなく、九大什器を通して構築され獲得された体験が、「拡張された博物館体験」となったといえる。九大什器の教育活用のあり方の一つとして、このような「拡張された博物館体験」を実践した卒業研究を位置付けることは意義があると筆者は考えている。

## 4. おわりに

以上、芝浦工大において2017～2022年度にかけて九大什器をテーマとして取り組まれた卒業研究を概観した。その結果、九大什器の教育的活用においては、教育利用が什器の存在意義になるだけでなく、卒業研究に取り組むこと自体が九大什器を通じた学生たち自身の「拡張された博物館体験」にもなるということが示された。また、卒業研究のテーマとして九大什器が扱われることが、九大什器プロジェクトの分野の広がりや持続性という点でもこれら学生の「活用提案型」卒業研究は貢献し得ることが示された。

学生たちの「拡張された博物館体験」についてまとめると以下のとおりであった。第一の経験が通常の博物館の事前学習、第二の経験が博物館内での博物館体験であり、第二の経験の中で「拡張された博物館体験」となる在野保存調査を経て、第三の経験は利用者自身が博物館資料にふれたあとの新たな活用を、博物館外に設定する

という点で、学生の卒業研究作成過程におけるさらなる「拡張された博物館体験」とみなすことができる。第一から第三までの経験が個人レベルでの体験であるのに対し、第四から第五の経験は、利用者から外部や仲間という他者へ向け「拡張された博物館体験」の共有であるとした。

今後も引き続き、筆者の研究室では、希望する学生に対し、九大仕器をテーマとして卒業研究に取り組む機会を提供していく。

## 謝辞

本稿の作成にあたり、三島美佐子氏には様々なご助言をいただき、また、学生研究においては、新井竜治氏より多くのご助言をいただいております。ここに感謝いたします。ならびに『九州大学総合研究博物館研究報告』編集委員会の先生方に感謝を申し上げます。本報告で取り上げた卒業研究の一部は、トヨタ財団2017研究助成プログラム(A)共同研究助成「活用文化財としての歴史的木製仕器の在野保存——新たな文化財概念の確立とその保存活用方策に関する実践的研究——」の支援を受けています。

## 注

- 1 三島美佐子・岩永省三(2014)「九州大学総合研究博物館・第一分館の刷新的利活用(1)経緯」『九州大学総合研究博物館研究報告』12:57-66.
- 2 新井竜治・三島美佐子(2018)「九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製仕器コレクションの価値と課題」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16:76-77.
- 3 同上.
- 4 倪夏希・橋田竜兵・野口雄太・菊地成朋(2020)「大学の廃棄家具の活用によるリノベーションと場の形成 九大仕器プロジェクトの試み」『日本建築学会九州支部研究報告』59:201-204.
- 5 松田芽子・堀賀貴(2021)「九州大学所蔵家具購入注文書及び家具購入設計図の史料評価及びその考察」『都市・建築学研究』39:23-37.
- 6 藤井美羽・関村啓太・藪下美雪・葉袋奈美子(2023)「日本女子大学の寮地区に残されている家具について——明桂寮における家具調査報告(1)」『日本女子大学紀要 家政学部』70:121-128.
- 7 九大博物館による、自校で廃棄されそうになった歴史的仕器を救済(レスキュー)し、積極的に保存・活用し次世代に継承するプロジェクト。2009年ごろから始まった九大仕器の救済・保存・活用に対する取り組みに対する総称であり、名称については現時点でも若干のゆらぎが見られる。以下本稿では、九大仕器プロジェクトまたは単にプロジェクトと呼称

する。また、これに伴い収集・保管されているコレクションを、本稿では九大仕器コレクションと呼称する。

- 8 三島美佐子(2018)「九州大学の歴史的木製仕器の保存と活用の新たなあり方に向けて」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16:67.
- 9 「芝浦工業大学システム理工学部25周年記念誌」芝浦工業大学大宮学事部(2016);「2023年度学修の手引 芝浦工業大学システム理工学部」<https://guide.shibaura-it.ac.jp/tebiki2023/systems/#> アクセス日:2024年2月26日.
- 10 芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科ホームページ「カリキュラム」<https://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems/paes/curriculum.html> アクセス日:2024年2月11日.
- 11 芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科ホームページ「カリキュラム」「授業紹介」<https://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems/paes/curriculum.html> およびシラバス「環境システム応用演習A」<http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/syllabus/2023/sys/139047.html?y=2023&g=R00&c=A> 「環境システム応用演習B」<http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/syllabus/2023/sys/139048.html?y=2023&g=R00&c=A> 以上アクセス日:2024年2月11日.
- 12 公益財団法人トヨタ財団 助成対象詳細 2017研究助成プログラム Research Grant Program [(A)共同研究助成]「活用文化財としての歴史的木製仕器の在野保存——新たな文化財概念の確立とその保存活用方策に関する実践的研究——」<https://toyotafound.my.salesforce-sites.com/psearch/JoseiDetail?name=D17-R-0714>, アクセス日:2024年2月11日.
- 13 関根彩(2018)芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科2017年度総合研究「歴史的家具の民間活用」.
- 14 同上:15-27, 42-44, 53-61.
- 15 永井花林(2020)芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科2019年度総合研究「歴史的家具を利用したリラックス空間」.
- 16 同上:11-21, 23-26, 31-40, 43-54.
- 17 熊谷和璃(2023)芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科2022年度総合研究「齋藤記念館における歴史的家具在野保存の可能性」.
- 18 「芝浦工業大学齋藤記念館」1990年竣工。地上2階、鉄筋コンクリート造・一部鉄骨造。延床面積約1900㎡。設計担当:福井晴朗・森靖・中島睦生子。以上株式会社相田土居設計ウェブサイトより。[http://www.aida-doi-architects.co.jp/works\\_detail/1990saitou-SIT.html](http://www.aida-doi-architects.co.jp/works_detail/1990saitou-SIT.html) アクセス日:2024年2月14日.
- 19 ジョン・H・フォーク・リン・D・ディアキング著(高橋順一訳)(邦訳1996)『博物館体験 学芸員のための視点』(雄山閣).
- 20 17に同じ:5, 11, 14-31, 34, 49.
- 21 佐藤公紀(2019)芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科2018年度総合研究「歴史的家具の再現の場と若者の関心と呼ぶためのアクションについて」.
- 22 同上:5, 33-39, 13, 29, 30, 35, 38.
- 23 新野翔梧(2021)芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科2020年度総合研究「九大歴史的家具による下北沢

- の魅力維持」：以下4-5, 14-21, 24-49.
- 24 同上：50, 52, 54-59.
- 25 真保晶子 (2018)「中古家具再利用の実践 — イギリス西部ブリストル, ソファ・プロジェクトの事例 —」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16：87-94.
- 26 順番に関根 (2018), 佐藤 (2019), 永井 (2020), 熊谷 (2023), 新野 (2021).
- 27 永井 (2020), 熊谷 (2023).
- 28 関根 (2018)：53.
- 29 福岡県立美術館喫茶室での九大什器の説明書きについては, 熊谷 (2023) の現地調査による. そのほか, マリンワールド海の中道, 大野城こころのふるさと館, 福岡市アーティストカフェなどでのパネル設置などの実例がある (三島私信).
- 30 前掲8に同じ.
- 31 同上.
- 32 同上.
- 33 リチャード・ドーキンス (日高正隆・遠藤和二 訳) (邦訳1987)『延長された表現型 — 自然淘汰の単位としての遺伝子』(紀伊國屋書店) 原題は *The Extended Phenotype: The Long Reach of the Gene*.
- 34 前掲2に同じ.
- 35 例えば熊谷 (2023).

## 参考文献

- 新井竜治・三島美佐子 (2018)「九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクションの価値と課題」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16：69-85.
- 熊谷和璃 (2023) 芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科2022年度総合研究「齋藤記念館における歴史的家具在野保存の可能性」.
- 佐藤公紀 (2019) 芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科2018年度総合研究「歴史的家具の再現の場と若者の関心と呼ぶためのアクションについて」.
- 芝浦工業大学大宮学事部 (2016)「芝浦工業大学システム理工学部25周年記念誌」.
- ジョン・H・フォーク・リン・D・ディアキング著 (高橋順一 訳) (邦訳1996)『博物館体験 学芸員のための視点』(雄山閣).

- 真保晶子 (2018)「中古家具再利用の実践 — イギリス西部ブリストル, ソファ・プロジェクトの事例 —」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16：87-94.
- 新野翔梧 (2021) 芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科2020年度総合研究「九大歴史的家具による下北沢の魅力維持」.
- 関根彩 (2018) 芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科2017年度総合研究「歴史的家具の民間活用」.
- 倪夏希・橋田竜兵・野口雄太・菊地成朋 (2020)「大学の廃棄家具の活用によるリノベーションと場の形成 九大什器プロジェクトの試み」『日本建築学会九州支部研究報告』59：201-204.
- 永井花林 (2020) 芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科2019年度総合研究「歴史的家具を利用したリラックス空間」.
- 藤井美羽・関村啓太・薮下美雪・葉袋奈美子 (2023)「日本女子大学の寮地区に残されている家具について — 明桂寮における家具調査報告 (1)」『日本女子大学紀要. 家政学部』70：121-128.
- 松田芽子・堀賀貴 (2021)「九州大学所蔵家具購入注文書及び家具購入設計図の史料評価及びその考察」『都市・建築学研究』39：23-37.
- 三島美佐子 (2018)「九州大学の歴史的木製什器の保存と活用の新たなあり方に向けて」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16：65-68.
- 三島美佐子・岩永省三 (2014)「九州大学総合研究博物館・第一分館の刷新的利活用 (1) 経緯」『九州大学総合研究博物館研究報告』12：57-66.
- 三島美佐子・新井竜治・真保晶子・吉田茂二郎・岩永省三・折田悦郎 (2023)「活用文化財としての歴史的木製什器の在野保存 — 新たな文化財概念の確立とその保存活用方策に関する実践的研究 — 報告書」トヨタ財団 2017年度研究助成プログラム TYTID D17-R-0714 報告書.
- リチャード・ドーキンス (日高正隆・遠藤和二 訳) (邦訳1987)『延長された表現型 — 自然淘汰の単位としての遺伝子』(紀伊國屋書店).

Received Jan. 14, 2024; accepted Feb. 18, 2024

# The Use of the Kyushu University's Historical Furniture Collection for Education: Case Studies of 'Extended Museum Experience'

Akiko SHIMBO

College of Systems Engineering and Science, Shibaura Institute of Technology  
Fukasaku 307, Minuma-ku, Saitama, 337-8570 Japan

The Kyushu University's historical furniture collection can be used both for higher education and continuing education. While it had been intended especially for practice classes, this article discusses an alternative way of using the collection for the purpose of education. The examples introduced here are the graduation research conducted by several students at Shibaura Institute of Technology. In the process of graduation research, the students visited the Kyushu University Museum and other facilities, which kept the furniture of the university, and studied directly from the furniture (museum material), and then set up their original space outside the museum and constructed the new roles of the Kyushu University's historical furniture in their mind. Taking these examples, the article considers the learning process of the students' graduation research through developing the ideas of the use of the Kyushu University's historical furniture as 'extended museum experience'.

**Key words:** Kyushu University's Historical Furniture Collection, museum material for education, extended museum experience